

# 弘安 7 年銘板石塔婆

昭和 46 年 3 月 16 日 八潮市指定有形文化財（考古資料）

●八潮市大字八條 4067 番地 2（八條八幡神社）

板石塔婆は板碑<sup>いたび</sup>ともいわれ、死者の供養のため、また生前に死後のやすらぎを願って造られた供養塔である。関東では緑泥片岩<sup>りょくでいへんがん</sup>が多く用いられ、扁平な石材の頂上を山形に作り二条線を刻み、その下に供養の対象となる本尊を仏像<sup>ぼんじ</sup>又は梵字や名号であらわし、年号、法名などが刻まれている。

板石塔婆は鎌倉時代から室町時代にかけてのものが多く、八潮市最古の板石塔婆は、弘安 7 年



(1284) の銘をもつこの阿弥陀三尊種子板石塔婆<sup>あみださんぞんしゆじ</sup>である。阿弥陀の種子はいわゆる異体キリクで、写実的な蓮座の上<sup>むりょう</sup>にのる。年紀の両脇には『無量寿経<sup>むりょうじゆきやう</sup>』の偈<sup>げ</sup>が記されている。市内で偈が記されているものは、この板石塔婆のみである。下部が欠損しているが、ほぼ完全な形で残っている。

『新編武蔵風土記稿<sup>しんぺんむさしふどきこう</sup>』には「八條殿社 塚上ニ社ヲ建、内ニ神体トテ古碑ニ基ヲ置、一ハ弘安七年、一ハ応安四年（後略）」と記されており、かつて八條殿社に御神体として祭祀されてきたが、明治 42 年（1909）に八條殿社が八條八幡神社に合祀されたため、現在は八條八幡神社に保管されている。

◎公開の有無：非公開

◎交通案内

- ・八潮市コミュニティバス北ルート「八條八幡神社」下車すぐ



本図は電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成したものです。